

## 『グローバル天理』第2号（通巻14号）掲載論文要旨

### **井上昭夫 巻頭言 「スペシャリストからジェネラリストへ」**

経済現象を人間の価値観や文化、宗教などと切り離してとらえてきた近代「経済学」に対して、「経営学」は生きる人間の現場そのものを研究対象にしている「総合学」と言える。天理大学改組に際して、国際文化学部地域文化研究センター、人間学部総合教育研究センター新設の構想が打ち出されているが、ともに総合学としての「経営学」的手法を視座に入れておかねばならないだろう。時代はスペシャリストよりジェネラリストを求めるように動いている。

### **太田登・中井精一 「天理教原典とやまことば（14） 方言資料と比較研究：『奈良県風俗誌』 [3]」**

天理教の原典研究をすすめるうえで必要とされる方言資料から「奈良県風俗誌」26類：言語を選び、教祖が言語形成期を過ごされた天理市南部の朝和村の記載事項のなかから、食物の名称や住居の名称および代名詞やアスペクト・待遇表現といった語法について報告した。

### **笹田勝之 「天理教における悟りの構造について—他宗教との比較を通して—（13）第二章「悟ること」について [1]」**

「分別界」は、対象界であり、そこでは「同一律・矛盾律」が支配する知性界である。それに対して、「無分別界」は、対象界を超越する世界であり、そこでは「即非の論理」が成立する靈性界である。

### **堀内みどり 「天理異文化伝道（13）天理教のコンゴ伝道 [12] —初代会長時代〈1963—1967〉 [6]」**

白熱なおつとめをつとめるコンゴの教友たち。彼らに対する中傷や天理教についての数々の誤解。それらを払拭するためにも飯田は数種類のパンフレットを作成。6月ラジオ・コンゴからのインタビュー。「みかぐらうた」が中央アフリカの夜に電波に乗って流れていった。

### **佐藤浩司 「天理教東南アジア伝道誌（8）戦前のフィリピン伝道 [6]」**

フィリピンへの伝道は、当初、目的は教えの伝達が目的ではあったが、どちらかというと経済的理由によるところが大きかった。これは、当時の日本人移民一般がそうであった。肉体勞

働が中心であった日本人の職業が、次第にその周辺の職業へと転換するにしがいい、出稼ぎから定住へと変わっていった。現地の状況の変化は、伝道目的の伝道者ができてくるようになる。道永善三郎は、その一人と考えられる。

## **金子昭 「天理経営学—その歴史・哲学・展望—（14） 思想編 宗教と経済・経営 [8]」**

土光敏夫は、日本有数の大企業2社の経営再建に尽力しただけではなく、70年代から80年代にかけて日本の経済界および政府の行財政改革にも多大な貢献を行った。彼は篤実な法華経信者の仏教徒であり、きわめて質素な生活ぶりであった。本稿は、経営に生かされた「菩薩道」の信仰的实践のあり方を探る。

## **佐藤孝則 「生命論としてのエコロジー（1）「環境」と「環境問題」の枠組み」**

環境問題における「環境」を空間を基準にして分類すると、「体内環境」、「人間環境」、「自然環境」、「地球環境」、「宇宙環境」の五つに分けることができる。全ての環境問題をこのように単純に分けられないが、分けることによって「問題」の本質を浮き彫りにさせることができる。

## **小滝 透「天理比較神秘論への試み（14）人間と宗教 [5]」**

今回は日本宗教史の状況を鳥瞰図的に概観してみた。それは、土着宗教と外来宗教の習合と競合の外化であった。その史的展開を、日本人の持っている精神構造の有り様と対照しながら述べてみた次第である。

## **小林正佳 「芸術・癒し・宗教（14）「筋肉による繋がり」？」**

わたしは、軍事教練とセラピーとの重なりやずれを、単なる状況や人間関係の類似や違いからではなく、そこで実際に人間が動く、動きの質やそれを生み出す仕組みに即して考えてみたい。その意味で、わたしにとってマックニールの論述で興味深かったのは、あるいは、大いに気になったのは、全体のテーマが「筋肉による繋がり」といった視点から語られている点だった。舞踊によって実現される紐帯を「筋肉による繋がり」というフレーズで括り取る時、わたしが考えてみたい特定の「舞踊体験」の重要な側面がもれ落ちてしまう。あるいは、「動きの質」に注目した時の、民俗舞踊の最も大きな特質が、いとも簡単に見過ごされてしまう。

## **金子珠理 「ジェンダー女性学情報（13）ケアの倫理 [3] ギリガンのパラドックス」**

先ずギリガンのパラドックスをフェミニズムの知識批判として解明する。ギリガンの知識批判はハーバーマスと対比するならば確かに近代性批判の性格をもつが、それは反近代主義的な価値観を賞揚するものではない。むしろ「普遍性」「合理性」といった近代的価値に基づく行為の、具体的な場における「効果」のレベルを問題化するものなのである。

## **塩澤千秋 「脳死・臓器移植—カナダ通信(13)イスラム教と臓器移植 [2]」**

近代医学がもたらすイスラム教徒への重大な影響についてインターネットに以外なほどの情報があった。イスラムの教理に基づいて解答を求めている姿がある。

## **上杉武夫「都市の再生に向けて——アメリカ通信（13）サステイナブルな町づくり [1]」**

都市の歴史を振り返り、サステイナブルなデザインと計画の新理論を紹介し、そして、サステイナブルな技術への議論と機会をさぐりながら、新しい世紀のサステイナブルなコミュニティについて論じる。バビロンとモヘンジョダロの二つの都市は、当時としては最大の都市であったにも関わらず、何故突如としてどちらの文明も滅びてしまったのか、その理由を探った。

そして、過剰なスピードで大規模に行われる都市化や、運河や人工河川による自然体系の変化などについて論じた。中世から現代への継承を知ることは、サステイナブルなコミュニティのゴールを見極めるのに役立つだろう。カリフォルニアにおける電力不足の現状は、現代の大都市を象徴している。サステイナブルなコミュニティの新たなコンセプトが求められている。

## **特別連載・シンポジウム「天理スポーツを語る」（2）**

### **宮田 元 「スポーツと宗教関係史」**

スポーツと宗教については共通点があるといわれている。それは、両者とも組織をもち、儀礼や禁欲的な面などをもちあわせている点である。ここでは、欧米におけるスポーツと宗教の関係を歴史的に跡づけたい。最初に、ギリシャにおける古代オリンピックをとりあげ、ついで、初期のキリスト教会、宗教改革後のプロテスタントにみられる、身体およびスポーツへの態度、さらに、20世紀のアメリカに至るまでの宗教とスポーツの関係の変遷について考えてみたい。